

銚子ジオパーク 再認定現地審査報告書(公開版)

【日程】

2016年11月18日(金曜日)～19日(土曜日)

【現地審査員】

菊地俊夫(日本ジオパーク委員会、首都大学東京)
原田卓見(様子町アポイ岳ジオパーク推進協議会)
中村有吾(室戸ジオパーク推進協議会)

【主な現地対応者】

越川信一(銚子ジオパーク推進協議会会長、銚子市長)、吉原正巳(同会副会長、一般社団法人銚子市観光協会会長)、工藤忠男(同会副会長、銚子ジオパーク推進市民の会会長)、小川正俊(同会事務局長、銚子市教育委員会生涯学習スポーツ課ジオパーク推進室長)、赤塚弘美(同会専門員、同室主査・文化財班主査(併任))、山田雅仁(同会専門員、同室副主査)、岩本直哉(同会専門員、同室主任学芸員)、若山昌弘(同会事務局員、同室主査)、竹本勝紀(同会会員、銚子電気鉄道株式会社代表取締役)、坂本尚史(同会教育普及委員長、千葉科学大学危機管理学部教授)、白土紀子(同会産業観光委員、NPOナルクくろしお運営委員)、宮内幸雄(同会産業観光委員、(有)銚子海洋研究所代表取締役)、和泉千恵子(同会教育普及委員、(株)エリアサポートジャパン 302 企画室)、梅津佳弘(同会産業観光副会長、銚子市旅館ホテル組合事務局長)、山口重幸(同会会員、銚子市教育部長)、春山敏郎(同部生涯学習スポーツ課長)、宮内隆夫(同会教育普及委員、銚子市文化財審議会委員)、沼田紘章(同会産業観光委員、銚子市産業観光部商工観光課主事)、高野美樹子(同会教育普及委員、銚子市教育部学校教育課指導室長)、笠上寛行(銚子市総務市民部総務課危機管理室主査)、伊藤小糸(銚子ジオパーク推進市民の会会員)、茂木洋佑(同会会員)、小玉健次郎(同会会員)、宮内敏(同会会員)、川原俊久(同会会員)、保立得造(同会会員)、山本佳臣(同会会員)、伊藤光徳(同会会員)、内匠五月枝(同会会員)、房州文子(同会会員)、加瀬久美子(同会会員)、藤身隆雄(同会会員)、島田泰枝(外川ミニ郷土資料館館長)、大塚憲一(銚子市漁業協同組合常務理事)、岩瀬広志(銚子市漁業協同組合参事)、室井房治((株)銚子山十代表取締役)、加瀬祐也(ヤマサ醤油株式会社庶務課主任)、信田進(余山貝塚美化の会会長)

【見学地点】

地球の丸く見える丘展望館、屏風ヶ浦、犬若、外川まちなみ、外川ミニ郷土資料館、犬吠埼・犬吠埼灯台、銚子ジオパークビジターセンター、銚子漁港(第一卸売市場)、山十商店、ヤマサ醤油工場、余山貝塚、展示施設(青少年文化会館)

【現地審査のまとめ】**1) テーマとジオサイト**

銚子半島を「太平洋に突き出た大地の右腕」に例え、隆起による大地の形成、利根川や黒潮など三方を囲む水の恵み、そしてそれらがはぐくんだ歴史・文化を主要なテーマにしている。

83.91 km²という比較的狭い範囲に 21 のジオサイトがほぼ均等に分布しており、その中には今年 3 月に国の名勝及び天然記念物に指定された「屏風ヶ浦」や、銚子の水産業とそれを支えた外川のまちなみ、江戸時代からつづく醤油産業、地形や気候を生かした台地上の農業など多彩な地域資源がある。人口 6 万余の経済規模も、コンパクトなエリアと相まって、じっくりと遊び学び食べるには最適の環境であり、ジオパークとしてのポテンシャルは高い。

ただし、これらの地域資源（ジオ・エコ・ヒト）を関連づけるジオストーリーが十分に語り切れていない印象がある。右腕を使って説明する半島の成り立ちはわかりやすいが、その成り立ちや特徴が銚子の暮らしや文化に深く関連していることを意識したガイド活動がさらに必要である。今回の、江戸時代の医師で文化人であった赤松宗且が描いた「銚子浜磯巡図」を使ったガイドは、今後のジオストーリー作りに期待を持たせるものであったので、そうした視点からさらにジオを掘り下げていくべきであろう。

ジオサイトの解説板やジオサイトへの案内看板については、まだ十分に整備されていない。主要なジオサイトである愛宕山（地球の丸く見える丘展望館）、犬岩および屏風ヶ浦には解説板が設置されているが、内容がやや難解であるので、そのほかのジオサイトも含めた整備計画を策定し、それを着実に進めていくことが求められる。ジオパーク認定以前に作られた観光案内看板は多数あるので、これらの修正や活用も方法の一つだろう。

なお、21 のジオサイトの中には、青少年文化会館ジオパーク展示室とビジターセンターという展示およびインフォメーション施設が含まれているので、ジオサイトの範疇から外す必要性があるほか、愛宕山に建つ「地球の丸く見える丘展望館」からの眺望サイトも、展望館自体をジオサイトとしているようにも受け止められるので、例えば名前を「愛宕山からの眺望（地球の丸く見える丘展望館）」とするなど、施設とジオサイトに関する考え方の切り分けを行う必要がある。

2) 保全

銚子ジオパークにおける主要な地質遺産は、水郷筑波国定公園の中にあり、さらに天然記念物に指定されているサイト（犬吠埼・屏風ヶ浦）もあるため、自然公園法や文化財保護法といった関連法規によって保護されている。特に、市教育委員会における屏風ヶ浦の「名勝及び天然記念物」指定への取り組みや、余山貝塚での市民主体による環境美化運動、ジオパーク市民の会による定期的な清掃活動などは、ジオパークを介した市と市民の協働として特筆される。

なお、屏風ヶ浦においては、消波ブロックや遊歩道の建設により海岸侵食が止まってしまったことで、露頭の風化や植物の繁茂が進むなど地質遺産としての価値低下が懸念されている。また、犬吠埼においては海岸侵食によって立入りが制限されている露頭もある。これら海岸侵食の問題は、市民生活への影響や事故リスクの回避と自然景観の保全の両立というジレンマを含んでおり、即座に解決することは困難であるが、地質遺産の価値を永続的に語り継ぐことで、市民自身はその兼ね合いを主体的に考える素地をつくっていくべきだろう。

3) 教育・研究活動

銚子ジオパークでは、市内にある千葉科学大学と地（知）の拠点整備事業の包括連携協定を

結んでいるほか、千葉県立中央博物館とも連携して、さまざまなジオパーク講座やジオガイド講座を行っている。また、市内や周辺の小学生を対象とした夏の自由研究ツアーやキャベツまるごと体験ジオツアーなど工夫を凝らした教育活動も展開している。

研究活動については、千葉科学大学を中心に、数多くの学術論文が書かれている。過去には、東北学院大学の調査により池の堆積物から数百年前の津波堆積物が見つかったことで、新たにジオサイトとして組み入れた例もある。推進協議会事務局においても、研究者や学生に調査研究に係る国定公園等の許可申請支援を行っているとともに、研究成果を市民にフィードバックする講演会などを積極的に開催している。

拠点施設としては、推進協議会事務局が入っている青少年文化会館の一角に常設展としてジオパーク展示室を設置している。小さいながらも、銚子の大地、生きもの、人の営み、利根川の歴史といった銚子ジオパークの要素を学習するうえでの必要な内容がまとめられており、隣接する考古学資料の展示や、企画展示を行うだけの拡充性もあることから、ジオパークの拠点施設としての機能は最低限備えられているといえる。ただし、青少年文化会館自体の老朽化が著しいことや、「青少年文化会館ジオパーク展示室」という名称では恒久的な施設として認知されにくい印象もあるので、より来訪意識を高めるような工夫が必要と思われる。

パンフレット類は、漫画を使って小学生にも親しんでもらえる簡単なガイドブックと、周遊用のガイドマップがあるが、銚子ジオパークのジオストーリーを詳細に知ることのできる書籍などもあったほうが良いだろう。観光パンフレットとの融合も含めて今後の検討とすべきである。

4) 管理組織・運営体制

推進協議会の事務局は教育委員会に設置されており、運営会議は週1回、2つの専門委員会（教育・普及、産業・観光）は2か月に1回程度それぞれ会合を行い、横の連携とジオパークの方向性を定めている。事務局には、併任も含めて3名の専門員（うち2名は博士学位保持者）がいるが、そのバックグラウンドは、地質学・気象学・考古学で、銚子ジオパークにおける活動を進めるうえでバランスがよい。2名は任期付きだが、市としてはパーマネントな職とすることも検討している。学術サポート面では、前述のとおり地元の千葉科学大学との間で包括連携協定を結び、連携を図っている。また、ガイドの受け皿となっている銚子ジオパーク推進市民の会が事務局と連携を図りながら主体的にジオパークに関わっている。一方、市民の間でまだジオパークは難しい地質公園といった意識があると協議会自らが吐露するように、その活動はやや内向きの感がある。前述の豊富な地域資源をまるごと活用した観光地づくりや、稲むらの火や渡海神社の銚子大神幸祭に代表されるような災害とのかかわりを活かした防災教育など、より多くの人を巻き込んだ活動の展開が求められる。推進協議会の予算は、市からの補助金に依るところが大きい。市の厳しい財政状況を考慮するうえでも、民間からの支援や、市民皆で支えていく体制づくりが必要であろう。

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

市外からのジオパークを活用した教育旅行が増えてきているなどの効果も表れてきている

が、まだ観光面でジオパークを活用しきれていないといった印象がある。観光協会のホームページ上でジオパークが語られていないことや市内での可視化が不十分であることはその証左ともいえる。しかし、一方で、商工会議所と銚子菓子組合の連携による「銚子ジオパーク菓子」の開発や、民間ホテルによる独自のジオパークツアーの実施、旅館組合と銚子電鉄がコラボしたレンタサイクルシステムの試み、屏風ヶ浦周遊クルーズ、銚子電鉄と学研のコラボによるラボ・トレインの実施など、民間によるさまざまな取組みも始まりつつある。駅前通りにある銚子の特産品販売や食事処が入った集合店舗スペース「銚子セレクト市場」内には、ジオパークビジターセンターが設置され、市民の会のガイドが常駐し観光客の案内を行っている。おりしも、JR 銚子駅が改築中であることから、そこでのビジターセンターへつなぐ工夫を JR と相談しながら進めたり、ドライバーを意識した誘導板を整備するなど、ゲートウェイとなるビジターセンターへの導線づくりに取り組むとよい。

ガイドは、主にジオパーク推進市民の会が担っており、ジオパーク講座やジオガイド講座への受講、実地ガイド、面接を経て、現在 20 名が認定されている。班長を中心に班ごとに活動することで、競い合いの土壌もあり、正確な知識を習得しようとする意欲も強い。

ホームページやフェイスブックなどで情報発信が行われているが、一部に解説のないジオサイトも見受けられるなど、なお改善が必要である。また、観光協会のそれとのリンクや融合もジオパークを観光に生かすために欠かせないだろう。

6) 国際対応

新しく設置された解説板には、テキスト部分も含めて英語が併記されているほか、ガイドブックも英語版が作られているが、ホームページの外国語対応にはまだ至っていない。また、拠点施設である「青少年文化会館ジオパーク展示室」における解説も日本語のみの表記である。外国客の需要が見込まれるのであれば、それらへの対応も望まれるだろう。

7) 防災・安全

防災教育では、小学生向けの防災パンフレットを作成しているほか、千葉科学大学と地域の防災関係者により立ち上げた「防災まちづくり研究会」では、防災啓発リーフレットを作成し、銚子の水の恵みと災害を体験・学習する「防災ブルーツーリズム」を展開している。これは、ヤマサ醤油の当主で銚子ゆかりの「稲むらの火」の主人公・濱口梧陵の史跡や、海の鎮護である渡海神社など、市内の災害に関する遺構や史跡を巡るもので、三方を水に囲まれた銚子ならではの取組みといえる。

ジオサイトにおける安全対策に関しては、銚子ジオパークの代表的なジオサイトが海岸線に集中していることから、市民の会では月例見学会の際に、津波を想定した避難訓練を行っているほか、ガイドを行う前には防災パンフレットを配布し、津波が発生した時の対処法を観光客などに説明している。

8) 結論

個々のジオサイトを結びつけるジオストーリーの構築やエリア内の可視化に関すること、ジ

オサイトの保全と適正利用に関する保全計画を市民とともに考えること、ジオパークとほかの地域産業や防災事業との連携を図り、新たな地域観光の振興に努めることなど、ひきつづき取り組むべき要素はあるものの、専門員の配置や拠点施設の整備、防災教育も含めた教育コンテンツの充実、保全規制の強化と市民を巻き込んだ資源の掘起しなど、大きく改善された事項が多く、前回認定時の指摘事項は概ね達成できたと認められる。また、千葉科学大学との連携による防災教育の推進や、ホテル・旅館組合・銚子電鉄などの観光業界での新たな動きも表れてきており、この4年間の成果は大きいものと評価する。震災以降の観光客の落ち込みを取り戻そうとする地元の人々の想いも、銚子が日本ジオパークとしてさらに発展していく原動力になるものと期待できる。以上のことから、現地審査員の総意として銚子ジオパークを日本ジオパークとして再認定すべきと判断する。

以上